



# ことのは



北条いあむ

## 手紙

---

臨月を迎えたことだし、出産に備えて十五年ぶりに実家に帰って来た。

自室は今も高校を卒業した頃のままでの面影を残していた。その中で父と夫が設置してくれたベビーベッドがお腹の中に我が子が存在している事を再認識させてくれる。

私、もうすぐ赤ちゃんを産むんだな。って少しくすぐったい、不思議な気分になっていると、「ちっとも荷物を片付けないまま、出て行っちゃうから……。今度リフォームするの、知ってるでしょ？ 赤ちゃんが生まれる前にちゃんと、片付けときなさいよ」

と、母が水を差す。

はい、と生返事をしながら、自分のベッドに腰掛けた。この部屋に住んでいた頃の私には、自分が結婚したり、ましてや妊娠して赤ちゃんを産むなんて思いつきもしなかつただろう。

よいしょ、と掛け声をかけて、立ち上がる。重いお腹をさすりながら、とりあえずクローゼットの扉を開いた。可愛くて捨てられなかった高校の制服、大好きだったアイドルが載っている雑誌やCD、寄せ書きが散りばめられた卒業アルバム、思い出が沢山詰まった懐かしい香りが胸いっぱい広がる。

そして、それはクローゼットの一番奥に隠されるように置いてあった。みかん箱くらいのダンボールにガムテープがぐるぐる巻きに巻かれてある。まるで、「何か」を閉じ込めるみたいに。ガムテープを剥がし始めると、なんだかお腹の奥がツンとするような、妙な感じがした。

ダンボールの蓋を左右に開くと、色とりどりの封筒が大量に入っていた。宛名は全て私で、差出人はすべてあの子だ。小学5年生の時に転校してしまった、元親友。引っ越してから、何通も手紙を交換した。けれど、些細なすれ違いから喧嘩をしまい、それっきりになってしまった。

今更だけど仲直りしたいと思い、手紙を書くことにした。短いけど、気持ちをこめて綴った謝罪の言葉。転勤族の彼女の家はもう、この封筒の住所にはないかも知れないけど、そうせずにはいられなかった。

ポストに手紙を投函して振り向こうとした時、下腹の奥のほうがズキズキと痛みだし、ぎゅーと締め付けられる感覚に襲われた。思わず、地面に座り込んで目を瞑る。

それからはあまり覚えていない。ケータイで母に電話して、タクシーで病院へ行き、十三時間くらい必死でいきんで、遠のく意識の中、ようやく元気な赤ちゃんの産声を聞いた。

出産してからは毎日が慌しく、あっという間に退院前日の日を迎えていた。

なかなか決められなかった赤ちゃんの名前もやっと決まり、夫に出生届けを出しに行き、貰ったところだ。入れ違いに母が着替えなどを持ってきてくれた。

「あ、そういえば、昨日手紙が来てたわよ。寛子ちゃん、懐かしいわね」

手紙を受け取ると、あの頃の甘酸っぱい気持ちが空っぽになっていたお腹いっぱい満たされる。

私は封筒から可愛い花の絵が散りばめられた便箋を取り出し、丁寧に開いた。

完

田中さんは、非常に仕事ができる派遣女子社員だ。入社して僅か半年で業務をほぼ完全に把握し、社内外での評判もすこぶる良く、報連相も完璧だ。

飲み会に誘えば、必ず出席してくれるものの、一次会で帰ってしまうし、酔っ払ってしまうこともない。私生活は一切語らず、謎が更に田中さんを魅惑的にしていた。

そんなある日、寿退社することになった女子社員の送別会で偶然、田中さんの隣に座ることができ、気になっていた疑問を彼女にぶつけてみた。

「田中さんは、なんでそんなに仕事ができるんだい？」

すると、彼女はやや困惑した表情で答えた。

「部長、おだてないで下さい。私なんて、皆さんの足を引っ張ってばかりです。皆さんが助けて下さるので、ようやく仕事が回っているんですよ」

そんな控えめな田中さんにますます惹かれてしまう。私に妻子がいなければ、今すぐにでも口説いてしまうのに！ いやいや、部下にそんな邪な気持ちを抱くのは倫理に反する。今夜は田中さんとの会話を楽しむことに徹しよう。

「田中さんの言葉には説得力があるよね。今日のクライアント宛てのメールも本当に素晴らしかったよ」

彼女は戸惑うように首を傾げた。そして少し潤んだ瞳で私を見つめた。

少し酔っているようだ。梅酒ロックを勧めたのは不味かったかな。

「実は私、言葉で人を操る事ができるんです」

とんでもない発言だが、田中さんが言うからには根拠があるのだろう。しかし、この場で聞くには少々憚られる。

会がお開きになりかけているのを見計らって、田中さんを行きつけのバーに誘ってみた。彼女は無言で頷き、私たちは誰にも気づかれず、退席することに成功した。

「言葉で操るってどんな意味なんだい？」

「そのままの意味です。自分でも不思議なんですけど、昔から皆が私の思った通りに行動してくれるんです。今だって……。部長とふたりっきりになりたいなって思ったの」

形の良い桜色の唇が蟲惑的な声を発する。彼女の誘惑を拒む術などなかった。

「でも、まだ試せてないことがあるの」

薄暗いホテルの一室、私の腕の中で田中さんがぼつりと呟いた。

「なんだい？」

「言葉で人が殺せるって、思うんです。」

だけど試す機会がなくて。部長で試してもいいですか？」

私は急に背筋が寒くなるのを感じた。本能が指令を出す。この女は危ない、早く逃げろと。

しかし、私の体は意思とは掛け離れた行動を取っていた。

「窓を開けてベランダへ出て。靴を脱いでちゃんと揃えて」

吐息のような田中さんの言葉が私を導く。

「さあ、柵を乗り越えて」

完

## ことのは

<http://p.booklog.jp/book/42688>

著者：北条いあむ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/iamhoujou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42688>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42688>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.